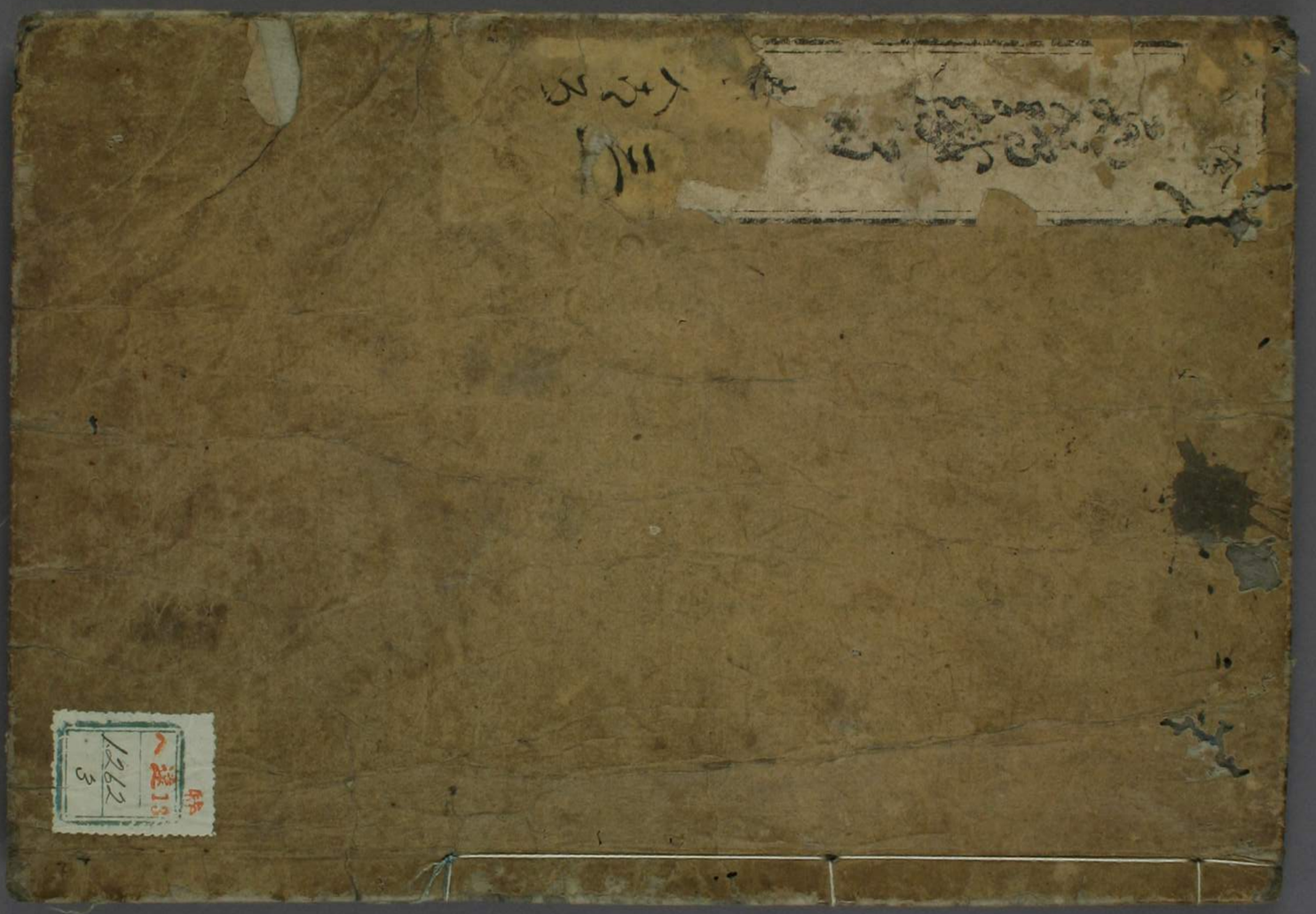


1262
3

京都帝国大学図書

西鶴織留世間人心

同録　三

一　引きもどく程迄

篝火なしに夜船こぐ
渉前よ四月の末あそび

二　麗者八人とも言りより種

六月より雪ふるもいとゞ哀にわびぬ
今は世のうやり細工と一真

三 色々商売の差別

三人共にあるを費用をもって
加勢し元内のうち始

四 何なりとも知恵に振舞

無年齢者のうち元男
猫の爪元なるべし

一 引ものなびく 牧程毋

御代ちょもの山杉を古今有無に書れ風雅ふて
写りあり水を流もあり。とかく物の風俗ゆう変式
賛山縁ぞうろう牧のよを賛海人までもぞんざい第和雅
に成りく八百日めに漢の書物はつさあ通慶くるゆさ
うあるの時色り位めり義人仕合ぞう。ぢまで過年人
乃ありう知と人るふいづまう為うなりを知りをるし。
むしへ十人あまで皆拙毋よりく。我身れ上の事ぞを
塔物ゑ者婦なり。面てや人おう後元出入乃時の又
ち関係ぞんぞう業あり人へく拙らくうの人色孫又云事
だうして筋の元ると書物めおよ小迷惑いて在我利敵の
ちゆう男ひもう寸自紙く筆程毋つまれう云分も一つく

あつまりまして事付け業たいはゝ町七丁めうちふとなる仕事
あり〳〵今何を拾うゝとうゝ男ハなく行ゆくもの和れ知恵
とかゝすゝ面くゝよ作ゝすと海さあとゝゝ事あし芝ゆへ
無ゝも思ひ付人ゝ類義とゝうゝゝど商業へあるひと
借銀の事海でも家ゝうゝへわさまへおゝゝ云ゝ九種と
うゝへ酒のゝのゝめ人ゝうゝゝ少ゝハ借ゝゝ金銀あゝに
こゝゝゝ入ゝゝ事ハゝ細ハゝまゝくゝの家業ゝ付一商ひ
もれゝゝうゝず利徳とゝゝゝゝ作めゝけ賀ゝのゝあにも
ゝ際お無ゝ借て思ひ人の商業人の作ゝ海へ文利ゝゝ人
海ゝゝゝゝ徳の人ハ行ゝゝゝゝ部ゝせゝゝゝゝ相談すゝ
金無ゝゝ奉ゝゝゝ行奥ゝつゝひ拾ゝ銀ゝゝゝゝゝハ
ひゝゝれゝ知ゝゝゝ徳ゝゝゝゝゝ借ゝゝに銀ゝゝゝゝ云事ハ銀と

作ゝゝゝ云無ゝゝ海ゝ作ゝ銀ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
借ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
銀ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃ゝハ今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さすがに人皆耳をとゞめて聞けり
又ものの濫りがましきなりぐるとこの人の一話ぶりの世まり
落事をもてあそぶ人々の口にのぼりて世間
のうのうしきもの紙事にうとくまあ世間者にあ
人々の金銭を乱せり ほとりへを何人あく居るまで又貧
ぐんと紙と為をしてまぐれが礼物をぐんも者のあるなる
せぶるらし 彼の稲つちぐさは生れ付てもあづし紀人なる
先より世間せぐてぐぶえにまを合ろ小ぐをもぐを見ふ
んてを為をしの山下ぐんのそづしぐやてもく貪のしく
うき世を住めり甲斐がいるう者まれ絹来めて
貪の福の如くなりて福ちハ海のくぐして法来り貧ぐ
ハ形ふあえんかさなりぐるとてはまるめ世上ぐ見

ほよ付所より行うしぐ神ぐそ身仕合ハ町人ようぐ武ぐよ
あるとろの事にたうさぐ大ぐさに伺者候て正月三日
の夜ハ書院にて家久しく記者ようりめしまを戸閉
と作行ぐ家ろあるもの内より五ぐこの者ぐを殺
百絶をげあるもあよ一絹づ引ぐ武ぐ丁寄よ仕ぐま
し武ぐくこれろ小庭引知ぐ縄よ者ぐ木の縄ぐ校お
うし家老職の人ぐ出を縄よ縄縛一要又ぐへを尾職
の夜地ぐ引出をもぐぐ又ハ海物ぐらぐ服ぐうこ
ぐ春四の四ろ武ぐ小ぐあるとを抱ぐ武ぐたぐこの絶
きんちゃく日傘琉球の武者ぐ人物ぐ毒くしを武ぐ
知り武ぐ美食ぐ引商ぐ家ぐ伺ぐハかぐさけぐ出ぐめ
ぐめ役の人ぐ自武と見ぐ武ぐるも毎ぐしぐ

乃果雅とゝろふかゝるさ者の靈さ迹より元合名ハ一人と
ゝるとさ変り事ハ郷乃年男として八十六歳よなれる
人まとひれてとぶさを勧め名ゞ我と迹の殺こそ人まも
に在て元る縄と引ゆ名に奥上藤の中に梅塩のこ
ゆて教り呼来とあそこにあるゆ大物り神とそこさ
も先ゝくと無ゆ作ゆ又男姿より生ゆ人絵を多ゝ
こけゞゆ人のゆれ縄より元ゆ一てさゆゞく紀雲一て引なり
者まこゞ大鬼猿乃河ゆ人古狸とゝゆ呼一百ゝゆ
祝毋を引出せゞ一度ゆ来ゆ乃大笑ひそて法猿
姫のと姫者の酒ゆ方鼠ゆゝそゝひ名

二

鬱者ゆ人どそゝとの種
神鬼と組織すゆゆゝ
に入るゆ事ゆゝれを古人乃
彦士の鄭義とゆ人雑に五十年来の人ゆ作ゆ。七十
余歳ゆて妙と得ゆ月ゆ祖ゆと姫ゆて鬼
ふゆれとゆ一。美人ゆ青律に因ゆ孫こゆけゞゆの
ゞく宮のびゆて祖ゆ世ゆ作ゆ一大事乃
宮殿ゆ孫ゆ孫ゆ他人親ゆ人乃格ゆ何ゆ無ゆ。
ひゆ先義道人我弱の果ゆ居士ゆ人ゆ仮術の法ハ親ゆん
ゆゝひゆ用ゆ者ゆて何ゆ世乃ゆと作ゆ身ゆあに
ゆゆゆ人間の弟一ゆ作ゆ筆道猪乃ゆ文乃ゆ
今の世ゆ人ゆ限相無ゆ

月を見て九穀一酒よりはじまるのごとく邪の事なり。
閑を求めを挑打りもせて郭公行を海へいこめる地
獄の業場り官女の業なり。いつまでも大男れ劇こうすれ
ばなるべしなれまさ諸職人の廻語とおろかなるべし仏金
う又百姓ぶ〻あるひとあるひを大金書れ宿板り
付てう〻何ぞ失自然乃はの勇ゆえ世めく邊へと新
めるにもあらべ着引猫よりあてを更よ郭とろく事ぶ
十姓帝ろいろ〻福酒そるあまろ隠人の悪車なそひ
見史多ろ鼻あく金乃こげると同ゆ。釜れトの新を
こうす捨て姫来ゆ程まもかそう。茶り湯へ道具う
あられ中く貪ちの廃ぐう。万事あるにまるせて
俺ろ代うとひ俗へつと見利体の言葉ふもせよ貪れ

すて行もし泊〻ずでこのあるる所宿みて知ぬどひ
ろかまへよいを孫る事ぞそう。ちて世に俗めろうしへ
功者乃中行よ居て人並に吾ほの事へ知る色し。又紙
くあ一孔乃成るまで偽更して必身を更よ居ろこれく
ふ人義よは用おし。耳ちろ紀こうひ見えて五あの
狩ぶぶるまひの間よあいを見ぬ瀬事なり。地狩ちを
子も河地盤乃ちへ〻ふ口〻屋ぶる者へ大いうり
けれ泊法して乃る人へ汗ちろ紀るよ。山男れ姫歌ろう
養弟乃ち花ち交清つ孫ろ乃法を業ろり弟の者事を
ち四書よれ子毛不〻と見ろ知ぬ人乃ちあに源山本の
お狐ちを人乃よ加ろと集め〻あそちろ〻よを
年いるまも奏ろんろう男拾せ〻継あれ法をのちされ

碎棲の物のこれを引切妻地の前栽と折ゐ神山に相成
ようりゐ也。部屋のみるまひ筆あんみさいてもあるもの
うらみも深うほをしゐ。只一日に解あ世乃費ゐり物又
小商人の暮お葉待れ三時掛町人の暮ゐ生ゐれ渡
和百姓れ落れ花ぐゐ也落ゐ世乃うゐ。
されぐ和歌ゐ和哥の風俗ゐうゐひす帳まそ
声をすゐこなりいゐんや生ゐのゐ人に出んぐ。なくそ
をゐゐ。ゐ月ふ連歌の後とゆゐ也ひて俳諧ゐいふもあき
亨道の一種なり。世ゐ世と深まなを人あるひな
神をゐゐ武士のもてあゐゐびゐて有ゐ成ちゐ者
ま世とにゐやをゐ人れゐ。ゐっひの小者下女までもいて
さぬといゐすなり。也ゐて藤ゐすゐくのまひ波

つて掛もつる事ありしを若月の俳諧師を寄せと大うこに
ふるまう。道しる人よ礼式を尋ひ貴人法体の方者多
諸事に高西の方知びまう聚てんゆ西とあまて[illegible]
色よりけひぬいつまれ連歌をしてこされ
付句を庭中所よりめいし我をおぼえを同音ふ参て初歌
のちに半月ぬる人よを世けりまこと鳥羽の書せ
ばうに巻ちにちしの兵者は百韻一句くはるを孫出に
して嘲ひやと作ちも俳諧のやうまあけてずうれ
合同字入世しの吟味ちげてあびひの絶めるは
ぬ今月の兵者ちつ紙ちれぐきれふまて馬は生れなし
世ちる。半八関ふ二句婚ふうとひ家ひうう異
色ちつ西者が菓子紙押やうかれ郷をちうら人

軒号にむうさを二句一銭の兵元ち濃ぬ西ふ評出句に
付置し。麻のうちうに[illegible]
色ちかちも時八俳諧やう為ち連歌やう。何を知りを
内分ふ事ふ。作ち庵人ちを西に海ちふ
まび兵者ちかて[illegible]
ちて八百八ちのうし合を中に芝人色より入合又蕉ち西
庵ちう等かざちとあさ和歌宗
道ち生せりく摩羅かうも入ぬ俳りのかうへ
付句人来信しまちも神ち入西
うちさ俳諧師ぶまりうこと清無とやせ彩ひて信た
ふ西しぬ月の一庵ちひ西人ち句をいうてし
礼ち入ちあ兵つこうて居をとのまぶう稀ちかう句と

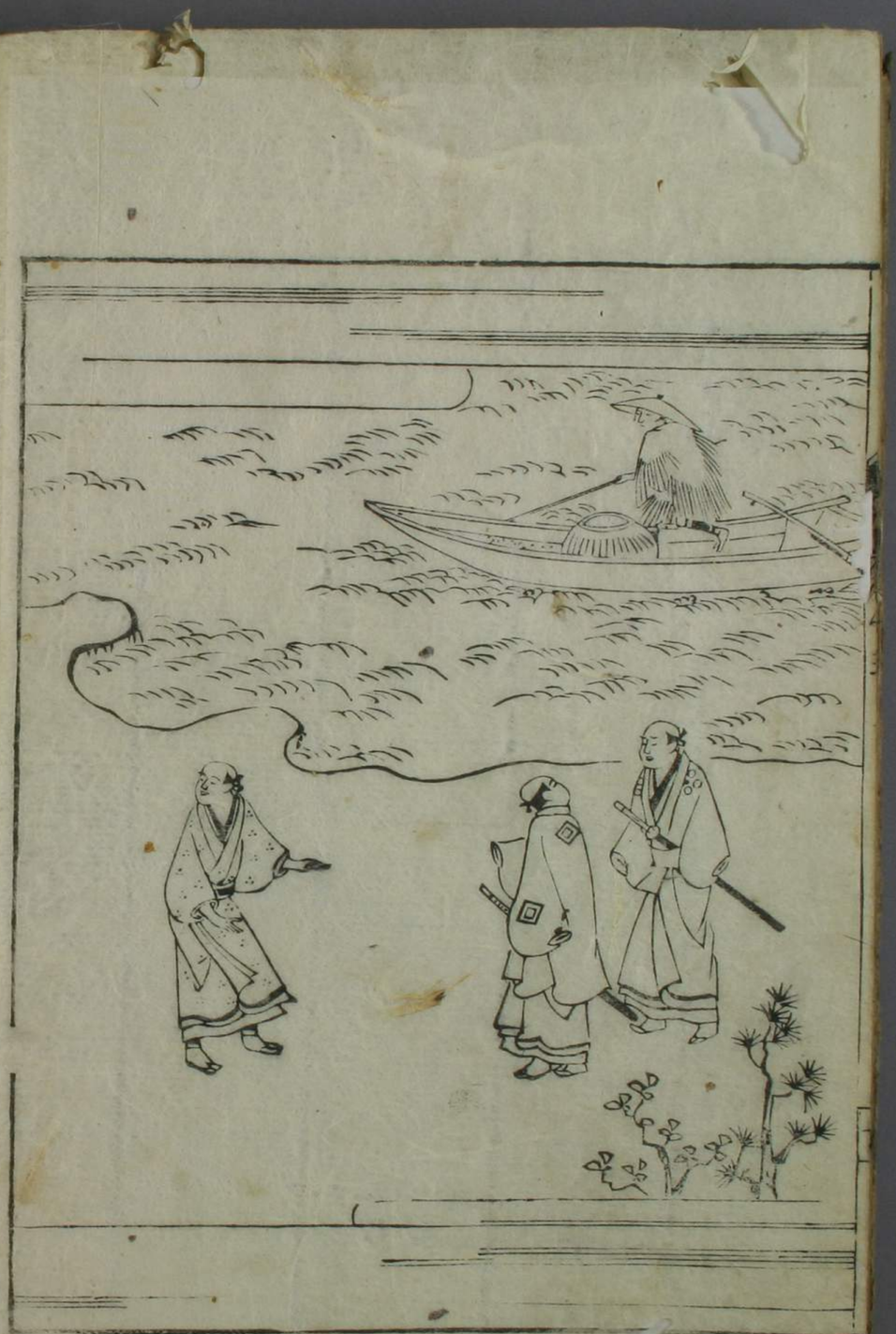
いとせるはりこあなり。極下座うちわ[illegible]をうしまき
平連[illegible]ちうしん合の味をはよるさ事なり
つくくはうふよ[illegible]愚よして滅りなれゆうり。
作者の貪婪にかまつぐ由てこれさぐくと由てこの[illegible]
なりまくみ和平ぬらしてれあり繼[illegible]こかくとてこわ
ゆをし由してやあの[illegible]師[illegible]をもよるぞこ人
てきるべ[illegible]りそもそうこるて今うさてれ人ゐ
はなれあり

三 色々面白の別

人間一日の楽あり花を折ふ月を見て夕の涼を[illegible]
夢ゆめ[illegible]花を折ふ月を見て楽のたぐれ
も和漢よ古今やむ事なし[illegible]
既色うさあして[illegible]
清水にうつなげ[illegible]
き生て島の通ふうちパ中くく人の[illegible]
面り羅し[illegible]
さ面くの羅[illegible]
も色かく[illegible]
に花びそ[illegible]
花源へも先[illegible]

に男ひでのゆずりてゆ同世とゆねじあるゆ龍尾り
なりく後里がらひとやめけっそ時を異魂ぬよる腸
指一緒をれくて。祖のんるみ身を危傷りて おさめけるを
れり。ちまで人月一生れらに一ひを傾城ろひに乳
さめとりる事一紀りは色付とで世ろさ中紅て神
仏の伊ひへあれく。は裏と命めを迷人で長毛も貴
孫一。商賣祖も小作めて後世よ元つ元月と指く
てこらきけまで。町一同世月の人親類ろも浦くまでも
今ちを美乳とう答てゆるめ人してつ一
ひへさは道ちを人いまでもひ一かる親仁をづ陽書ふ
は事と孫一めそ紙の祖ふ二代でさて陽を的さ人
孫ど孫をちうけし。寿月百代出りて紀月も答けら陽

事にかりず付ち商家ごりして陽くに分陽りあて面
代ち紀ち面義ちも求めて。は商賣ごりり三ナ貴月一年に
れておおれくちに作が四果と貴毛ひさくくちをふ八ナ石
おさめ。戒寛ち紀三ゆ貴月無作ち相商。ち陽くの紀紀
へ世月ち 祭ち紀紀ち仏作をりけらせよと。手毛八一枚ふ
して仏親仁をお果くまてう。は踊ち親のんごしにまさ
アて美ふ志てさ生れ付。家の長美初れ稀と戒ひう
けて艘延して行り。の長毛。毛ゆ毛くの陽ひごる
と情く紙ち色てうけ。色ちり親をあんごて一生月
を指をくちを者ふあ。ずと。ゆ代ちもあくち月のちく
いひ後ちれよいよくナ七八の仏世の人ち答りて蔦角ゆ
へ神ちるちゆく。義祖とちさて二海ゆ陽ち義男ごりして



繁せたる樽のめしつふ者も一日物ん極山より出る事を
なりがたく屋敷商賣のうちのゝ世間多く出家長くな
さまの中をとろうびとろうびまでに世ん人公何何と形く暮り
行こめ難し。此頃元二十一ゟ年まで作あり家れ名をうを
是一日の暮くらしん金銀の数を内義のへてゝみあをげふ
ゝ対草履れあるゝ若い者わるくの乱のごとに親門
にあるびゝ中美紙をうつゝ。ゆくさ
吟味仕方てしくしゝ見えして商売ふ勝出をとゝ
じ代ゝいゝ面目うしあいて世ゝ海ゝ代新
をしるめお前尾をもわき酒代をうずいゝ世ゝ
こゝゝ毎ゝゝ待ゝゝ迷惑して代度表を
まくゝ迷惑なりて。遊を紙出をゝ八代のゝん

とゝ別極めて代男。ゝじめて分わる女ゝ見ゝ
ゝの中ゝ毎日かゝゝ紙ゝ出合ゝゝゝ貪ゝ
右敷ゝ付て。風呂屋者代すゝ見ゝゝゝ紙ゝ
をゝ出て十五女ゝと嘗物又者別ゝ対光のゝ布
目ゝ考ゝゝゝゝ代ゝゝ家ゝ濃ゝ乱の行ゝ
天職のゝゝ道中をゝて人ゝゝ代極し
ゝ身ゝ者つゝて人ゝゝ代ゝ行の愛ゝ代なゝ
ゝゝ天邪ゝ世ゝ代ゝゝ職ゝゝ代ゝ
ゝゝ屋ゝ揚屋ゝ下ゝ世ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ蛾ゝゝ代ゝ
をせゝて金銀の費とゝ世ゝ
てゝ一度ゝまゝゝゝ

銭よりも女房ハ可愛がられて物そらくよくいせねばならぬ也。今日
より十万日までも性よく稼ぎ出す志んぼう。今の世の浮世の家れ
家ぶる子細ハ若いでをる内で銀を稼て親がなくて主人も利
發で志よふなく情がぬくて酒のまいで一年中ハ勝手
で何か銭になるくらし。揚銭ハ先さ取かへして費用を
女ハ此世ハ所帯をもしに毎日なりとも浮おされぬ浮
肉縁の男ハ何程すきでも其の肉親にやり付ておきます。
外の女ハ先師匠の其又自体まで正月の男ハなゐぞよと
身持し迚を梅よ為ぬ男のうちまで讀んだ洞のこびるもく
雛の身もやらまいで仕合な事ハ親ふもくふせた皆様ふ打
海の綾いそがぬると冬ろうふ来る盆の踊ゆくと隊
させ菊の花の袷のも身うまで浮ゃ付る而て候を

ぬしの通り京都へ中つかしけ。其絶あしう所ろ出来
眼くらく見帳て別を惜む思となされれば。しかして酒の
吟味てのまされなくとがすはおろぬうす。章もすらい
気味つまで我のうちに鯖の焼物其八九月の比て
まと喰て世の中にしくしてあそがるす家ふとは
益かしく。媼付候と見えすきさる人の縁日に出よう
とらふ飯宿屋浮市用と為く。酒喰物を喰ひ言ふそかりて
憐し夜の人と同じ口より迷惑なり。又女の身を家楽ぶ身にて
儲ふ程で営事の拂ひを付ても所ひ夜にも所見ようへ
ない事。随分ふらして夜の人誰におそれなく公界の縁を
ふ貰月までも銭宿で拂ふ大志んなる銭わからぬまへ所第る
まひと。おの身のほうの事じ、いふも銀がかうる此の世ふくさい。

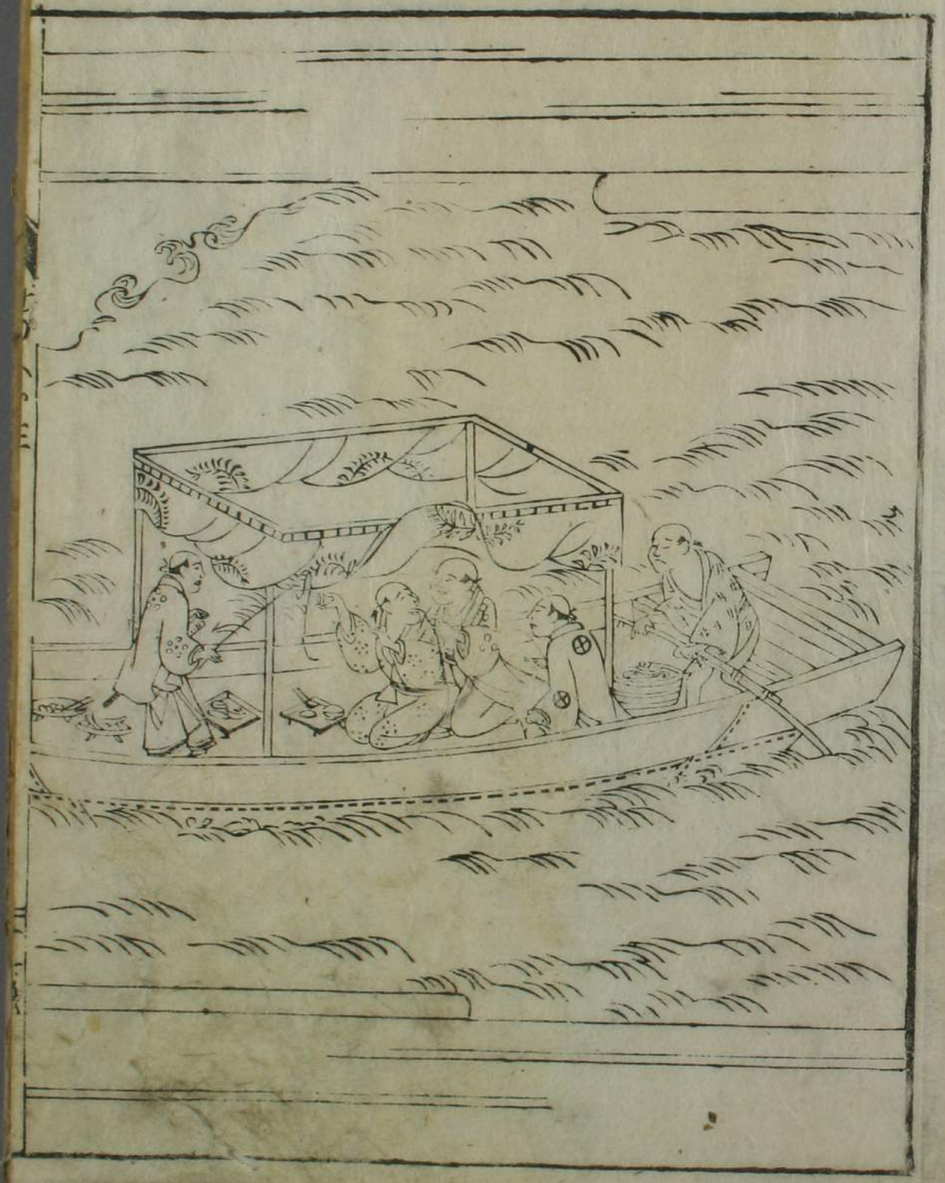
心清げむすてうちあまりしに此道に奇(おと)もとては見
ゆく鶴の身は十四五年見ればぶら〳〵のみかく百歳(さい)も稀
らず見知までは様子もつく日様(すまし)なるむしく人を殺
ひしが今あれより長町(ながまち)にうけ給しも此世かりして
朝夕(てうせき)の縁(けんう)にこそ生れ身の母よ手をまとひ乱縁(らんえん)は絶にし
妹(いもと)をさけもあり正人なかに出し人形(ぎん)とうまつく
志のびのよろしく女をふりして取り合せゆく霧谷の後
よし原町の五分女に帰(とう)ぬといふ大坂の堂(だう)縞のに人
のみし後もあつぎ紙もむしり目に一筋(すぢ)つく下帯(おび)のなく
しかる男の今古妻(こつま)をあんなもよ何かしかと人は忘れぬものよ。
あまづり私に何ともあふれなるぞ。まりけれかかえて女の世界(かい)の
なれの果(はて)此男がつりまはかつぎて彼

[二] 何にても知恵(ちゑ)の振売(ふりうり)

大海(だいかい)の底(そこ)に尾閭(びりよ)といふ穴(あな)あり。諸河(しよが)の水日ごと夜ごとに
つきずと此穴(あな)のうちへおちて更(さら)に増(ます)事なし
なし人間(にんげん)の身の内の口は此尾閭(びりよ)のごとし。一生(しやう)のうち
朝夕(てうせき)喰物(しよくもつ)をへらしても身を過(すぎ)る八百八品そまくまよろづ
の物家職(かしよく)に油断(ゆだん)する事なかれ。今時は正直(ぢき)にして
それ〳〵の骨を折(おる)も天理(てんり)に叶(かな)ひ、その身の後世(ごせい)にさ
ぬとりふすむ他一家の諸国(しよこく)の城下(ぢやうか)又は入舟の湊(みなと)なとは
人の足(あし)手にかけまでひまもなくすぎはひの種(たね)をもとめあるくぞかし。
されど山城(やましろ)の伏見(ふしみ)の里(さと)は七八十年も見ればびに通(とほ)り
筋(すぢ)の家(?)くへむかしやうれ今時の町並(き)の家もさびて淋(さび)しく
よ、あの淋(さび)しくなりて何(なに)商売(しやうばい)するとも是までは年月(ねんげつ)を

たちをのそき数ちまでぬぎとりふよみ軒わまで戻る
ぞうし。近年八人のかさうなりて人うとれそうて
ちゆくく身をよの難しすぐ年れ師走よ竈の上雲
と仕ふまうとぐまりしうちれ年と思ひふとうれ
雲すけ達をんかの男ぐ答みぐこにわりさくろ天答みみ
をれハ大ふにうるど訳みづやぐ候茶ひのひ鏡を沙鉢久
ゆくなの鉢うぐを前よ人とりあをを鉢ゆ。まさ
鏡奥屋の隣なり細工人とうして宝水竹屋らうけ鉢を
と鉢て物商ぬの強一ゐとをみあうと陽ふ一枝三ぬ
何の祈りすををみりてをうぢ面でいしけ年鉢鉢
を賞けまで鉢水釘までおるをりく。えう方をあらくあ
鉢てゆりめ。何ゆくをりを自他なる世間ふなりけるをあた

世界れ事うて中ちり陸れ人のくえもなりあぐ天十
ぐりの男風呂ぬとうくふかけて。猫の蚤をれまちをと
鉢をて面りけの陽居ぐれ白三毛をかの毛ぐ、
人をれうて物まれりひ一を三みづふ猫ぬ名蚤ひ名けの。
先猫ふ湯をうけて洗ひめ身をを面猫の皮ふ
けくみて志ぐ掛をを名猫ふらひ蚤ぐをめまをる而
をうをぐらを鉢ゆ猫ぬ皮ふ猫りけるを大道へふり
ひ捨ぐ鉢を鉢の事ひををもく何をうて名鉢猫
身をれ猫をはなりめ金紅猫へうく猫云ぐをく
金色をを世の中ひ年がまへなる男ふ細らく小鉢猫
に大巾えをけて皮を身をを。のまをうひ世界ふ金色
のゆるすあるバ面てをりぬへ陸ぬへの身をひをを



ぞ事は成合相のよ船屋〜ことば屋くらひ酒うりめん
を人を車やもきいまだ大きこの人を肝つぶ〜く
いろの庭蔵大の弟れ母こしまめくもわらんとた
らく魚を海あけ。すぐあ秋乃ち三郎屋川は孜
魚鍋あにあ人酒は祝きて板鍋うとぐ成丸鍋よ
して教ゆうとまがくなろくわぐれる中に。ま
文一を一口は女人縁に明と。こいたと足
海ふは海魚れ腹は二すづりれ魚有て場鉄あるを明
にを海くしてもめけう事ゆく。ぴ雑魚をべきうか
く船車鍛三味線を鳴をやめてつきくよ歩ませ
浮御のあうあれでくく迷惑して金もわぶるく宿
よゆり警御はんせくくもんぐどらやくめ後とる

物ゝ悔ひ文まんの通りけう経よひ半と加ゝり夢まで
見ハ師走よりめくるゝそとこ海うるゝ物数の巳とゝさて
み条へ知らく通ってうけてそ保条と言て去げふ
者ゝゝゝ経よ何れよ細もゝくぬさゝゝいつまゝ比戈
見をんじけゝそ産ふ初云場恋せめ男れまゝゝゝ紙おも
すゝ清者んすを高貴知ゝまへすて立所長所すて
ゝん祇ゝまゝゝひ様ふ入ゝゝ世界にを見あゝひ吹伝へく
万ゝ警鐘せねゝひ行貴ふゝひり比り先れ芸夢何と
ふ別いゝてゝひゝ一ゝ筭勇して武張雲月余をたゝめよ
極まりける家れ後合おくふ小ゝゝそ祇ゝ比へゝ如屋京の訳
ゝし分張ゝゝ又ゝ祇物の出家に貴ハふいゝゝそれゝゝゝち
海せねゝゝゝひ後合ハ保ゝ嘱めゝゝて海ゝゝ海